

一般公開特別シンポジウム 「ラムサール条約釧路会議から 30 年を振り返る」

ラムサール条約としてアジアで初めての締約国会議（COP5：釧路会議、1993年6月）の開催地となった釧路市（釧路湿原）、そして釧路会議で登録されてから30年間がたとうとしている今、5箇所の登録湿地（厚岸湖・別寒辺牛湿原；霧多布湿原；谷津干潟；片野鴨池；琵琶湖）の歴史を振り返る。

1. 釧路湿原（くしろしづげん）

[1980年6月17日登録]

所在市町村：釧路市/釧路町/標茶町/鶴居村

登録面積 = 7,863ha

特徴：低層湿原、タンチョウ生息地

保護の形態：国指定釧路湿原鳥獣保護区 釧路湿原特別保護地区/釧路湿原国立公園特別保護地区及び特別地域

概要：我が国最初の条約登録湿地。湿原の80%はヨシ・スゲ群落とハンノキ林が特徴の低層湿原となっている。ミズゴケが生育する高層湿原もわずかではあるが分布している。カモ類、ハクチョウ類の越冬地、渡りの中継地であり、タンチョウの主な繁殖地でもある。さらにシマフクロウ、オジロワシ、オオワシ等の大型鳥類も生息する。

2. 厚岸湖・別寒辺牛湿原

（あつけしこ・べかんべうしづげん）

[1993年6月10日登録]

所在地：厚岸町 登録面積 = 5,277ha 特徴：

低層湿原、大規模オオハクチョウ・ガンカモ渡来地、タンチョウ繁殖地

保護の形態：厚岸霧多布昆布森国定公園/国指定厚岸・別寒辺牛・霧多布鳥獣保護区/厚岸・別寒辺牛・霧多布特別保護地区

概要：汽水湖である厚岸湖とそれに流入する別寒辺牛川周辺のヨシ・スゲを中心とする低層湿原であり、中央部は部分的に高層湿原となっている。海岸沿いには塩性湿地が発達する。タンチョウの繁殖地も分布し、厚岸湖は冬でも全面凍結しないため、オオハクチョウの国内最大級の越冬地である。

3. 霧多布湿原（きりたっぷしづげん） [1993年6月10日登録]

所在地：浜中町 登録面積 = 2,504ha 高層湿原、タンチョウ繁殖地

保護の形態：厚岸霧多布昆布森国定公園/国指定厚岸・別寒辺牛・霧多布鳥獣保護区/厚岸・別寒辺牛・霧多布特別保護地区

ミズゴケ泥炭地を基盤とする高層湿原と満潮時に海水が流入する2つの汽水湖から構成される。オオハクチョウ、ヒシクイ等ガンカモ類、ハクチョウ類が多数渡来する。また、タンチョウの繁殖地も分布する。

4. 谷津干潟（やつひがた）

[1993年6月10日登録]

所在地：千葉県習志野市 登録面積 = 40ha 特徴：

泥質干潟、シギ・チドリ渡来地

保護の形態：国指定谷津鳥獣保護区谷津特別保護地区

概要：東京都心から30分ほどの近さに位置し、住宅地、高速道路に取り囲まれた東京湾に残された数少ない干潟である。全国でも有数のシギ・チドリ類の渡来地。都心からも近く鳥類など身近な自然の観察地として多くの人々に親しまれている。2019年9月、第11回日本湿地学会大会が習志野市谷津干潟自然観察センターで開催された。

5. 片野鴨池（かたのかもいけ）

[1993年6月10日登録]

所在地：石川県加賀市 登録面積 = 10ha 特徴：

大規模ガンカモ渡来地

保護の形態：越前加賀海岸国定公園特別地域/国指定片野鴨池鳥獣保護区片野鴨池特別保護地区

概要：石川県の西部に位置。池及び休耕田からなり、周辺は樹林帯である。マガン、ヒシクイ、マガモ、トモエガモ等のガンカモ類が渡来するほか、オオタカ、オジロワシなどの猛禽類も見られる。2013年第5回日本湿地学会大会が加賀市で開催された。

6. 琵琶湖（びわこ）

[1993年6月10日登録]

所在地：滋賀県 大津市/彦根市/長浜市/近江八幡市/草津市/守山市/野洲市/高島市/米原市/東近江市 登録面積 = 65,984ha 特徴：

淡水湖、大規模ガンカモ渡来地、固有魚類生息地

保護の形態：琵琶湖国定公園特別地域

概要：滋賀県の中央部に位置。我が国最大の湖沼で、70種を超える水生植物が生育する。魚類はホンモロコ、ニゴロブナ等11種の固有種を含め53種が生息する。毎冬、コハクチョウ、ヒシクイ等4万羽を超える水鳥類が渡来する。

II. 報告者プロフィール

新庄 久志 (しんしょう ひさし) : 1948 年帯広市生まれ。1972 年北海道教育大学釧路校卒業 (植物生態学を専攻) し、釧路市立博物館 (植物担当学芸員) に勤務。1990 年環境庁自然保護局野生生物課出向し、ラムサール条約、野生生物保護を担当。1993 年釧路市ラムサール会議準備室 (第 5 回ラムサール条約締約国会議開催を担当)、その後釧路国際ウエットランドセンター主幹、釧路市環境政策課 (湿地保全主幹) を歴任し、2007 年退職。現在、釧路国際ウエットランドセンター主任技術委員、技術委員会委員長、JICA 専門員

澁谷 辰生 (しぶや たつお) : 厚岸水鳥観察館

伊藤 大雪 (いとう だいせつ) : 2019 年に北海道大学環境科学院で修士号を取得後、NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラストに就職。現在はトラストが指定管理運営する霧多布湿原センターで勤務し、自然ガイド、植物相調査、外来植物防除、シカよけ電気柵の管理、野外散策路整備などを担当。最近の注力事業は、ビジターセンターによる植物観察会および標本作成事業「ハーバリウム霧多布」で、地域の生物相や自然史を後世に伝える取り組みを行っている。

大畑 孝二 (おおはた こうじ) : 1959 年、岐阜県生まれ。(公財) 日本野鳥の会施設運営支援室室長。ウトナイ湖サンクチュアリでは、千歳川放水路等開発問題への対応、

加賀市鴨池観察館 (片野鴨池) では水田農業とカモ類の共存の模索、豊田市自然観察の森では矢並湿地 (東海丘陵湧水湿地群) のラムサール条約登録に関わる。著書に「これがカモ! カモなんでも図鑑」、「里山と湿地を守るレンジャー奮闘記〜豊田市自然観察の森とラムサール条約」他。

小山 文子 (おやま ふみこ) : 谷津干潟自然観察センター広報担当。保育士として保育園に勤めていたが、野鳥の魅力を伝える仕事に就きたいと 2002 年から日本野鳥の会レンジャーとして当センターに赴任。施設の指定管理者が変わるたびに所属先も変わり現在に至る。広報業務の他、ラムサール条約登録記念イベント「谷津干潟の日」事務局や豪州ブリスベン市との湿地交流、ボランティアコーディネイト、ミツバチの特性を活かした環境学習なども担当している。

植田 潤 (うえた じゅん) : 昭和 44 年京都生まれ、小学 4 年生より滋賀に移り住み、その頃から始めた野鳥観察をきっかけに、滋賀の生物全般について調査研究を続けている。公立中学校の理科の教員を経て、14 年前より湖北野鳥センター職員に転職、湖北地域のみならず琵琶湖を含む滋賀県の自然の面白さや貴重さを広く一般に伝えるべく活動している。8 月より湖北野鳥センター所長に就任、近年はびわ湖に直接触れる子どもの体験活動に一層力を入れている。